

暴力の十字路ーマードックの小説について (1)ー

山本, 長一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

273

(終了ページ / End Page)

285

(発行年 / Year)

1990-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003617>

暴力の十字路

——マードックの小説について(1)——

山本長一

1

「怒れる若者達」の一人に Iris Murdoch が仲間入りをさせられてから久しいが、すでに24冊もの小説を世に問うたこの多産な作家は、そのリーダブルな文章によって複雑な人間の構図をとらえてきた。その出自からして哲学研究者兼作家としての宿命を背負ってきたマードックは、自らは哲学的作家としてのレッテルを好まないようであるのに、読者の側では、そのテキストの中に、かくされた哲学的主題がリゾームとなってつらぬいているのに無関心ではいられない。彼女の小説家としてのスタートの動機はなへんにあるのだろうか。最初の来日の際の座談会で「……作家というものは要するに、できたものが問題であって、どういう手法を使っても、まったく自由であると思っています」⁽¹⁾と述べて、哲学というきゅうくつな立場より自由な形式をもつ小説の方が魅力があるという趣旨の発言をしたのが思い出される。形式としての自由は内容や対象についての自由を要求する。偶然性に満ちた世界という対象を正確に美しく描くためのメディアとしての小説にすべてを投げうって転じたのである。ただし虚構としての小説にも伝統や形式があり、彼女自らが認めているようにプロットやストーリー性を大切にしていた19世紀の小説、なかんずくロシア文学に傾倒しているから、決して斬新な手法の作家とはいえないであろう。この点に関しては保守的な作家の一人に数えられると思う。小説の危機が叫ばれているように多くの作家がブルーストやジョイスに迫ろうとしたが越えることができなかった。その中でマードックが黙々として小説の生産をしつづけてきたそのエネルギーは特筆されていいだろう。

彼女の小説は自らの思想なり哲学なりを読者に押しつけようとする目的論的営為をうすめつつ、また時には拒否しながら、ロラン・バルトの「悦楽」(ジ

ユイサンス)を味わえる適度な娯楽性と美学を有している。思想と悦楽の間のたわむれにマードックの作品のアイデンティティがあるように思える。いずれにしても彼女が英国の「偉大な伝統」の一人として叙位にあずかるかどうかはともかく、その手法の保守性において十分な資格を有するであろう。イーグルトン流に言えば、ブルジョア公共圏の読者に消費されるに足る反動性と美学の倒錯に、高踏派をもくすぐる哲学的身ぶりの「助六」みtainな厚化粧をして付加価値を高めようというマードック風戦略はアカデミックな文学制度と「ハーレクイン」風読者の受容の混交を射程に入れているようである。

2

マードックの哲学的エッセイ、“Against Dryness”において「現代文学が暴力にとっても関心があるのに悪の説得力のある絵を描いていない」⁽²⁾といっているのは、彼女が《暴力》という根源的な流動体の表象としての《悪》に注目していることを示しているのではないだろうか。処女作 *Under the Net*⁽³⁾以来、暴力を明らかに意識した作品を次々と発表している事実がそれを裏付けている。*Flight from the Enchanter*,⁽⁴⁾ *A Severed Head*,⁽⁵⁾ *The Unicorn*,⁽⁶⁾ *The Italian Girl*,⁽⁷⁾ *The Time of the Angels*,⁽⁸⁾ *A Fairly Honourable Defeat*⁽⁹⁾などの初、中期の作品だけでなく、最新作 *The Book and the Brotherhood*⁽¹⁰⁾に至るまで、マードックの得意とする暴力のシーンは、日常の周辺におこっている多様な暴力現象と同様、ありふれたものと同じく看過してしまいがちだが、大きなプロブレマティックを懐胎したグラフィックなシーンを見せてくれる。理性の対極にある暴力を集団・社会に遍在するものとして、哲学の分野においてでなく、小説という四輪駆動車を駆って登坂しようという試みは狭いテリトリーを脱属傾化する運動に他ならない。ディスクールとしての哲学とアモルファスな暴力は対立するものであるから、哲学は後者をこれまでとはかなり疎外してきた。人類の起源から今日に至るまで《暴力》と《闘争》は、人間の関係性、社会形成上不可欠のモメントであるのかかわらず、これらの隠花植物として一いわば「呪われた部分」として一われわれの目から巧妙に隠蔽されてきたのである。哲学の非嫡出子である暴力は、それでも数少ない学者たち、例えばヘーゲル、ベンヤミン、レヴィニストロース、パタイユ、ジラールなどのまなざしのきざはしに焼きつけられ、特に後の二人によって、社会形成のメルクマールとして重要視されている。日本においては、今村仁司の研究

に集大成されて、マルクスの価値形態論などを包摂し、抜本塞源の精緻な理論に構築されている。暴力に関する普遍学たる今村理論を最大の視座にすえて、マードックの小説を分析してみることにしたい。

3

マードックの小説のうち、*The Unicorn* は文学用語辞典⁽¹¹⁾の中で「ゴシック」の項に収められているように、きわめてゴシック・ロマンス的色彩に富んだ作品ということになっている。この小説のヒロインの Hannah は以前夫殺害未遂事件をひきおこして、西アイルランドとおぼしき荒野の海岸近くの Gaze Castle という館に幽閉されている。この館の不在地主たる夫の Peter の命を受けた腹心の部下たちによって Hannah は外へ出られないように常に監視されている。人里はなれた中世の雰囲気をもつ Gaze Castle はゴシック・ロマンスの舞台としての条件を備えている一方で、この小集団は、より大きな社会の審級としてのアナロジックな構造を保有しているのである。

夫殺しは未遂とはいえ、タブーの侵犯であり、この小説の始まる以前に《暴力》によってこの集団が危機におちいったことがあるという事実が知らされる。前過去での暴力にこの Gaze Castle が汚染されていた事実、すなわち、始めに暴力ありきである。Hannah のフランス語の家庭教師としておもむく Marian はこの館に近付くにしたがって激しい恐怖感に襲われる。ゴシックの条件としての恐怖というより、見えざる暴力に満ちたカオスを前にした時の彼女には、その恐怖の何たるかがわからない。ただ恐しいのである。彼女は「いわれなき」(irrationnelle)暴力の血の匂いを感じとっていたのであろう。ルネ・ジラルドはオーディブース神話の「父殺し」と「近親相姦」のテーマに言及して、フロイトがそれに人類の抑圧された《欲望》をよみとるのに対して、抑圧されるのは欲望でなくて《恐怖》すなわち絶対的暴力に対する恐怖であるとのべている⁽¹²⁾。『アッシュャー家の崩壊』での沼に映ずる館を前にしたときの主人公の抱いた恐怖と似たものだったにちがいない。この館について Marian は次のように感じたことをのべている。“Some deep lack of assurance in the place itself.”⁽¹³⁾ この家の安定感の欠如は、ジラルドのいう「供犠の危機」の状態に Gaze Castle がおちいりつつあることを予想させている。Peter による Hannah への日常的な暴力とそれに対して近隣のもう一つの館 Riders 邸の Pip との情事と墮落と、それを抑える夫との間の暴力、その結果 Peter は断崖か

ら落ち、命はとりとめたが、障害ある身となる。その罰としての Hannah の幽閉、そして Peter の第一の手下 Gerald と、使用人の Evercreech 姉弟—ジラールはかれらを「暴力の双生児」、互いの「分身」と称している—による共同体の成員の全員一致による暴力的な監視というように暴力現象のプロセスを経てきたのである。人類の原初的暴力をくりかえすことは、その社会を危機におとしいれるので、神話においてよく見られることであるが、儀礼として「管理された暴力」を周期的にくりかえすことによって前者の暴力をそらし、その伝染をくい止めて、その共同体の秩序を保つことになる。ヴァルター・ベンヤミンのいう「法維持的暴力」⁽¹⁴⁾にあたるものであり、良き暴力によって悪しき暴力の呪われた感染から共同体を救う効果をもっているとされる。成員同士の相互的暴力は、互いの「分身」を生み出して、際限のない暴力が燎原の火となって荒れ狂い、やがてその集団をソドムとゴモラの町のように崩壊させてしまう恐ろしいものである。この暴力による闘争は互いの差異から成立している秩序を破壊して、非差異化のカオスの地獄に成員を追いやってしまうのである。今村理論では次のようにいっている。

暴力によって生れた社会関係はつねに暴力を内在させており、たえざる危機が社会関係を脅かす。社会関係に危機がおとずれるたびに（非差異化）、社会関係は運命的に暴力によって危機をそらす必要にせまられる⁽¹⁵⁾。

これらの危機を回避するために「身代り犠牲」が考えられるようになった。そこで二項対立的関係（相互性）を維持したり、また危機におちいったために、回復を要求するときには、排除される《第三項》をでっち上げる。つまり「暴力的に抑圧され、排除され、あるいは殺害される」⁽¹⁶⁾のが第三項である。その典型的なケースが「供犠」（サクリフィス）であり、「身代り犠牲」であるといっている。この現象は単にレヴィ=ストロースの「冷たい社会」においてのみあてはまるだけでなく、「熱い社会」であるわれわれの社会においても、巧みに隠蔽されているけれども、おこり得る現象である。

ひるがえって Gaze Castle に目を向けてみよう。ここで7年前におこった Hannah をめぐる夫殺し未遂事件とその処理は、現実的暴力の脅威を成員たち相互に知らしめることになり、この集団の完全な崩壊を防ぐために犠牲＝第三項を選び出し、それを全員一致して排除するという犠牲のメカニズムを介在

させなければならなかった。この第三項こそ Hannah という「眠れる森の美女」(the sleeping beauty), 「つれなき手弱女」(la belle dame sans merci) である。

「神話的」暴力は、ギリシア神話やアフリカの王たちの儀礼に顕著に見られるものであり、またこの小説の基底構文としてかくされた重要な主題である。「冷たい社会」においては第三項としての犠牲者は、贖罪の山羊、牡牛、子羊など動物供犠の形をとることも多い。アフリカの王と同様に、Hannah は唯一性をもたされ、隔離されているいわば聖別されたもうひとりの王である。犠牲者として彼女はそれなりの条件を備えている。ジラルはギリシア悲劇のテキスト中の例に供犠のいけにえをみたす性格を指摘している。それによると、それは共同体のあらゆる成員に似ていなければならないし、同時に、似たものであってはならず、近いものであると同時に遠いもの、同じものであると同時に別なもの、分身であると同時に聖なる「差異」でなければならない。連続と不連続のリミナリティに息づく両義的存在としてのいけにえがジラルのいわんとする性格づけである。Marian は Hannah のことを少し病的でどことなく宗教的な感じをもっているといっている。沢山の鏡がある部屋に閉じこもって、髪はタバコの火でところどころ焼け、ウィスキーの匂いをさせて、余り身なりもかまわないが美しく、聖性を帯びた囚われの貴婦人は聖と俗の両義的性格を有している。彼女が鏡に自分の姿をうつすのは、分裂する「分身」としての自らの鏡像に、無意識に、その統合したアイデンティティを求めていることになるのかも知れない。鏡の中では、たえず虚像の交換、交錯が行なわれており、そこは幻想にとらわれたもののシミュラクルの世界であるから、たえざる分身の分泌をしつづける非差異化運動の閉ざされた一次元の世界ともいえる。

Riders 邸の Pip の父で老哲学研究家の Max は Hannah の存在をスケープゴートであると明確に指摘している。彼女は一人の罪人であり、キリストのイメージをもつ「ユニコーン」であるともいっている。プラトニストの Max はキリスト教を信じていないが、次のような重要なことをいう。

"I'm not a christian. By saying she's guilty I just mean she's like us. And if she feels no guilt, so much the better for her. Guilt keeps people imprisoned in themselves. We must just not forget that there was a crime. Exactly whose probably doesn't

matter. by now.”⁽¹⁷⁾

かつて「一つの犯罪」があったことを忘れてはならないということは、ベンヤミンによれば法を破壊する「神話的暴力」の荒ぶる力があり、人類の始祖がカインとアベルのように兄弟で殺し合うようなかつての一つの犯罪をひきおこす、この根源的暴力を Hannah の場合も忘れてはならないということである。だれが犯したかは問わない。集団のだれかをスケープゴートにしてその根源的暴力の恐怖のみを忘れないしておくことである。そのスケープゴートを儀礼化して、制度として定着させることが供犠の存在の十分な理由であると Max はいみじくもいあてている。この集団の秩序と文化を維持する装置としての第三項を排除することで供犠をつづけなければならないのは人間の宿命といえるだろう。Max がつづけて、「Hannah をスケープゴートとして利用せざるをえない」ということは、かつての「一つの犯罪」を、形をかえて制度化するという暴力の差延化とメタモルフォースによって永遠に合祀しようとする「靖国法」である。ここには供犠と犠牲のメカニズムが顕著に見られる。

「ユニコーン」という想像的な生物が一角獣という動物であると同時にキリストのイメージをもあわせもつものであるとすれば、《聖》と《俗》の両義性を有しているということになり、その姿そのものも「この分れぬ状態こそが、あるいは、馬、犀、山羊などの混合形態である一角獣の未分化のありようこそが、神的なものや悪魔、純潔と性的放縦といった、互いに相容れない象徴を併存させるよう、むしろ仕向けてきたのだ」⁽¹⁸⁾とその両義的性格を強調している。この性勇猛な、暴力の化身そのもの一角獣を馴致させることは不可能だが、無垢な処女が近付くとその膝におどりこみ、これを王のもとにもってゆくとキリストのすがたになり、やがて処女マリアの躰内に入ったとされている。この一角獣は、処女マリアがやがて生む神の子イエスの位置をとり、エロティックな解釈をすれば、彼女の躰に沈みこむ男性の力の際立ったシンボルと化していることになる⁽¹⁹⁾。杉橋陽一によれば、グリニュー美術館にあるタピスリー『貴婦人と一角獣』には、処女が差し出す鏡に自らの姿を映すユニコーンが織込まれているということである。しかもリルケの『オルフォイスへのソネット』第二部の四では、

銀の鏡のなかに、そして処女のうちに、まことの存在を得たのだった。

というくだりがあり、Hannah が鏡にいつも自らの姿を映しているのと暗合しているのも興味がひかれるところだ。世俗の眼には存在しない（空想上の）ユニコーンが鏡の中と、処女の躰内に存在することをこのソネットは伝えているということである。さらに Hannah は Max によると、Até の女神に隠喩されることによって、その聖性と暴力を体現しているということがいっそう明らかになっている。再び引用してみよう。

Ate is the name of the almost automatic transfer of suffering from one being to another. Power is a form of Ate. The victims of power, and any power has its victims, are themselves infected. They have then to pass it on, to use power on others. This is evil, and the crude image of the all-powerful God is a sacrilege.⁽²⁰⁾

力をその犠牲者によって次々と伝染させる。この力を他者に行使することが《悪》なのである。この伝染をくい止めるには「完全な犠牲者」になることがその集団からも望まれる、Hannah はこのようにして犠牲＝第三項として、その集団＝Gaze 館から一致して下方へ排除されているのである。Até 神はゼウスの怒りを受けて地上に落下させられた、いわば下方へ排除された神々の第三項である。Hannah は次々と犠牲者を生み出し、悪への長い連鎖を紡いでゆく Até と同じ狂気と聖性を具有し、相互的暴力を伝染する《パルマコン》的人物であって供犠の中心にすえられることになるのである。パルマコン的人物はその集団の周縁へと追いやられつつ中心にすえられるマージナル・マンともいえるであろう。

Marian がこの中世的世界に外からマジソ線を越えて入ってきた時は、あの事件後7年目になっていた。彼女は Gaze Castle の住人たちをよく見て (gaze), その正体を読者に伝える語り手でもある。彼女の目に映ずる Hannah 以外の住人たちは、供犠の舞台のこの館でどのような役割をになっているのだろうか。Gerald はこの館の主人 Peter の従兄で、同性愛の相手であるが、Peter の奴隷としての、いわば Peter の分身としての地位につき、Peter 不在の Gaze を支配している。彼は、Peter がアメリカ人の青年をその同性愛の相手に選んだので嫉妬にかられるあまり、Hannah をそそのかして、Riders 邸の Pip との情事や墮落ちの計画に手を貸すことさえした。そして Gerald

は Hannah のことを Peter に密告し、この計画は暴力によって阻止されてしまう。Gerald はそれまでは Hannah の下僕だったものが、Hannah を監視し、支配する役に転じる。Hanna は女主人→奴隷へと地位の転倒のプロセスをたどる。

Evercreech 姉弟も Gerald と同じく Peter にやとわられていて、弟の方の Jamesie は Gerald と同性愛の関係をもち、姉の Violet もまた Marian に同性愛の関係を迫るのであった。以前 Riders 邸から移ってきて Hannah を守っている Denis はこの館で暴力の汚染をまぬがれている唯一の住人である。マードックは Denis のようなマイナーな作中人物にその作品のキーワードを語らせることをする傾向が強い。Marian は当初 Gerald にひかれるが、次第に Denis に親愛の情を寄せてゆくのである。Denis を除いてこの館の住人たち（ただし二人の女の召使いを省いて）は全員一致して、Hannah の監視・幽閉に《労働》を提供しているのであり、こういった性と暴力の過剰(エクセ)に第三項が存在することで、カタストロフィの危険を回避してきたのである。

一方、外部から7年前に Max の息子 Pip が Hannah 奪回を謀り、失敗し、又5年前に Gaze に来たばかりの Jamesie も Hannah を連れ出そうとしたがこれも失敗し、Gerald の暴力により罰を受け彼の奴隷になり下がっていた。Max の大学での愛弟子だった高級官僚の Effingham も Hannah に近付き、夏期休暇には彼女に会うために Riders 邸に滞在するようになった。なお Riders 邸には、Pip とその姉の Alice が住んでいて、Alice と Effingham が結婚するよう Max は自分の娘と愛弟子に望んでいたこともあったが、Effingham は今では Hannah にひかれていた。そこへ Marian が家庭教師として Gaze へやってきたのである。外部のこれらの人たちも Gaze の相互的暴力の「分身」たちによって嚴重に監視されている一種の封建的、鎖國的社会いかにえれば“non-lieu”が Gaze であろう。この「非場所」に想像上の動物ユニコーンを求めて外界＝真境から闖入することで Gaze Castle はさらに存在の危機におちいるが、これまでは Hannah を第三項排除することで乗り切ってきたのである。Hannah はこの幻迹の中で、すっかり無力感をいだくようになり、服従に甘んじているのである。

カオス的状況のくりかえしを予告している。この地方(西アイルランドらしい)を7年毎に襲う洪水や川や沼の氾濫により近隣の村は流失して消えてしまい、川にはサケも登らなくなっている。しかし Denis は今年サケが登っていると Marian に語っている。その洪水では底なし沼の水があふれ、車が流されて何人かの命が奪われていた。メガリスやドルメンが屹立する荒地は古代の祭儀をしのばせる異教の地である。伝承や民話によくあらわれる7という数は、この小説においても「獣の名」であり「獣の数」である666のように大きな刻印を人のひたいならぬ小説の語りにもうがっている。7年目に眠りから目をさませるべく、外からやって来る王子ならぬ Effingham を誘って Marian は、Denis の協力を得て、Hannah 救出作戦に取りかかることになる。この計画を Effingham に彼女がもちかけると、彼は次のように思う。

This vision conjured up by these words frightened him very much indeed. He pictured Scottow on the road behind him. There was violence, violence asleep in that situation. He did not want to be the one to waken it.⁽²¹⁾

眠っている虎の尾を踏むごとく、法維持的暴力にメタモルフォースして眠っている暴力を目覚めさせる危険を感じとっているのである。囚われ人であると呪文をかけられ、自由を放棄してしまった Hannah にショックを与えなければならないとしぶりがちな Effingham に迫って、ついに実行することになる。だが Max の娘の Alice の邪魔が入ってこの度も失敗に終わってしまう。Gerald による邪悪な暴力の嵐が Gaze に吹き荒れることになる。彼は、自由とか幸福とかは無意味であり、われわれはすべて大きな機構の中に組みこまれて、運命に支配されているのにすぎず、絶対的な権威に従っていかなければならない、それゆえに Marian にもその権威に従っていかなければならないという。彼女もこの大きな権威すなわち Gerald を中心とする暴力による秩序に屈服することになってしまう。周縁から中心へと暴力的供犠のメカニズムの体制に吸いこまれてゆこうとしている。

Marian たちの Hannah 救出作戦は失敗したとはいえ、それまで Hannah をスケープゴートにしてきたこの集団が、7年目にして再度の供犠の危機をむかえたことにはちがいない。姿の見えない邪悪な僭主の Peter がついに Gaze

へ帰ってくるといううわさがたち、現実的暴力の恐怖が一段と Hannah たちを呪縛する。He had always feared the violence that lay behind the legend of the sleeping beauty.⁽²²⁾ というように Effingham も又、底なし沼の沼気のように立ちのぼる暴力の汚染が拡散することを恐れている。7年前の暴力の再現がこの Gaze をふたたびカオスにつきおとすことになるであろう。Gerald は Hannah を一室に閉じこめ、性の奴隷におとしめてしまう。暴力と性のディオニュソス的オルギアはこのようなカオスの状況の特徴をなすものであり、《過剰》の《蕩尽》とパタイユはいうであろう。主人であってイトコの Peter の妻を犯すというタブーの侵犯は、この集団が、男色、レズビアン、近親相姦、婚外性交などのオルギアに耽溺して《消費》のみの経済におちいったことを示しているといえるだろう。

欲望のミメーシス⁽²³⁾は暴力のミメーシスをひきおこし、この相互的暴力は分身の分泌をしつづける。それに抗して、Denis は外部からの最後の一人として Gerald に立ち向かうが、カオスの暴力エネルギーを吸収して肥大化している Gerald のブラックホールに吸いこまれて、たちまちのうちにたたきふせられてしまう。この度も Gerald たちの暴力の勝利と Hannah のスケープゴートへの排除の確認で終るとすれば、その後続く Effingham と Alice の古い恋の復活、Marian の Denis への新しい恋の芽生えというふうに、Hannah の犠牲のもとにシェイクスピアの喜劇の結末に似てすべてまるく収まる大団円でこの小説も終ることになるであろう。Jamesie はいう。

“Our happy family will not be broken up. For all shall be restored, revived, renewed, and far more beautiful than it was before!”⁽²⁴⁾

Hannah がいうように、このまま自らに厳しい戒律を課し、苦しみに耐えて祈るだけの生活にもどることになるとすると、それは供犠のいけにえとして甘んじることになり、それまでの7年間の儀礼化され呪縛された Gaze への逆もどりを意味するであろう。

ところが Marian は、それは新しい魔法の始まりであり、a far far stranger and more dangerous spell than the old one.⁽²⁵⁾ であると気付き恐怖をおぼえる。シェイクスピアのロマンス劇はここには全く存在しない。Hannah

が Marian には、自分はこれまで崇拝者たちを糧にして生きつつ、「神の役」を果たしてきた「いつわりの神」であったと、そして自分に寄せられる周囲のものの自分の苦しみへの信仰によって生きてきたのだから、真の苦しみは今まではなかったのであり、今始まってこれからつづくのだと。ということは、自ら知らずにスケープゴートとして聖別されて、俗なるものから聖なるものへ、下方から上方へ排除されていたのである。外界の力に頼ることなく自らの集団の中で、彼女は己れの苦しみを己れ自ら引受けてゆこうとひそかに決意しているのであろう。その決着のつけ方は何か。Marian は背後に「はるかに異常で、はるかに危険な」流動体=暴力を感じとったのである。

「閉じられた静かな暴力のカプセル」(a closed capsule of quiet violence) が蠢動し始める。Pip による7年ぶりの Hannah 救出の試みは、眠れる森の美女を目ざめさせる王子のヴァリエーションである。だが、Hannah はこれまでの7年間何もしようとしなかった Pip を拒絶してしまう。Gerald が Peter に代ることは、Gaze の絶対的支配者として「塔のようにそびえ立っていた」Peter の潜在的暴力の Gerald への感染であり、二人の間の非差異化による Gaze Castle の供犠の危機は決して過ぎ去ったわけではないのである。

'Gerald is Peter now. He has Peter's place, he is possessed by Peter, he even looks like Peter. He is no longer what keeps Peter away from her. Nothing keeps him off her now.'⁽²⁶⁾

今村理論では、非差異化された「無差別空間」は第三項の胎児の羊水である。この空間は、「第三項の位置をめぐる、対立と抗争をくり返すという相互暴力状態が現出する。その事態を私は、分身(ダブル)、ミメーシス、偶有性ないしはゲーム性といった用語で特徴づけておいた。」⁽²⁷⁾と今村理論でうたっているように、一つのブラックホールに似ていて内外から暴力のエネルギーを集中させることになり、カオスの危機の状態におちいつているのである。それは Gerald による Hannah の性的、暴力的奴隷化、再度の監禁と、それに続く Pip の行動と挫折、さらに決定的な暴力である Hannah による Gerald の射殺にまで荒ぶる力の一連のミメーシスに根底から Gaze はゆすぶられる。ヘーゲルなら、主と奴の承認をめぐる闘争ということになるだろうか。ともかく、全員一致による Hannah の第三項排除の成立は失敗したことになる。今や無

差別に相互的暴力をふるい合う、自他の非差異化によって、シミュラクルの世界と化してしまう。閉じられた鏡の国における合わせ鏡の無限の数の自己の映像は分身のコピーに他ならない。

Effingham はそれまで Hannah に「聖母」、「純潔な女神」というイメージをいただいていたのが、その背後に狂暴性をみとめざるをえなくなった。彼はこの鏡の国を脱し、現実を見つめる (gaze) ことで、Alice への愛に再び目ざめようとする。一方 Marian は「この家に蓄積された邪悪な兇暴な力」を感じとっていた。その力を体現し、Gaze の外からの遠隔操作によって Gaze の住人たちを支配下においていた隠された邪悪な神 Peter は、ついにニューヨークを発ち、Gaze Castle にもどろうとしていた。Hannah は更なる直接支配と日常的な暴力の伝染を恐れ、自らが受ける苦しみを他に伝染させることを防ぐために、その苦しみを一身に引き受け、暴力のミメシスを切断しようとする。そのためには自殺しかない。身を躍らせて海に飛びこんだのである。最後に至り Hannah は自らの意志で選択して死による連続性の勝利を望んだのである。エロティシズムと究極の死との融合によって、バタイユのいう不連続の存在としての Hannah の「死が存在の連続性を顕現する」⁽⁸⁸⁾という逆説を導き出したのである。いわれなくこの世に投げ出された不連続の存在の一個の人間は、その不連続の破壊、組織された形体の解体を欲望して死に走ったのである。

さて、Peter は Gaze Castle に来る途中、あの供犠の危機を隠喩する7年目の洪水のために彼の車が流されて溺死してしまう。更に Pip も銃の手入れ中に、自殺ともつかない暴発で死ぬ。Hannah をめぐって、彼女に欲望する三人の男の死を彼女の死は巻きこんでしまった。供犠の危機は Hannah という第三項の排除効果によって回避されるはずであったが、その集団内の現実的暴力の余りの過剰はスケープゴートの単一性を消尽した上に更に多くの犠牲を必要としたことでここでの供犠は失敗し、この小説は結末をむかえることになる。

Gaze Castle という一つのモデルとしての社会における儀礼と供犠の危機、そして第三項排除によるスケープゴートメカニズムの成功と挫折は、あまねくより大きな社会集団のアナロジーを示しており、その社会集団にひそみ、隠蔽されている荒ぶる力の恐ろしさとたちまちのうちに崩壊に至らしめるそのエネルギーに読者は置き去りにされて、しばし立ちつくすだけである。この「呪われ

た部分」の暴力を社会形成や文化的秩序の日の当たらない非嫡出子から嫡出子へと庶子準正して白日の下にさらさなければならぬことを知るのである。

注

- (1) マードックは、夫ジョン・ベイリーと共に1969年に最初に来日した際、『芸芸』4月号で、野間宏、丸谷オーと「文学の可能性」と題しての座談会に出席して発言している。
- (2) "Against Dryness," *Encounter*, XVI (January, 1961), p. 20.
- (3) *Under the Net* (London: Chatto and Windus, 1954).
- (4) *Flight from the Enchanter* (London: Chatto and Windus, 1956).
- (5) *A Severed Head* (London: Chatto and Windus, 1961).
- (6) *The Unicorn* (London: Chatto and Windus, 1963).
- (7) *The Italian Girl* (London: Chatto and Windus, 1964).
- (8) *The Time of the Angels* (London: Chatto and Windus, 1966).
- (9) *A Fairly Honourable Defeat* (London: Chatto and Windus, 1970).
- (10) *The Book and the Brotherhood* (London: Chatto and Windus, 1987). ただし、この稿を書いたあとで、*The Passage to the Planet* (London: Chatto and Windus) が出版されたので最新作ではない。
- (11) *A Dictionary of Modern Critical Terms* (London & New York: Routledge & Kegan Paul, 1987).
- (12) ルネ・ジラルド著『暴力と聖なるもの』(古田幸男訳、法政大学出版局、1982年)、p. 185.
- (13) *The Unicorn* (Penguin Books, 1966), p. 29. 以後テキストはこのペンギン版を使用する。
- (14) ワルター・ベンヤミン著『暴力批判論』(野村修、高原宏平訳、晶文社、1969年)参照。
- (15) 今村仁司著『暴力のオントロジー』(勁草書房、1982年)、p. 29.
- (16) *Ibid.*, p. 29.
- (17) *Unicorn*, p. 98.
- (18) 杉橋陽一著『一角獣の変容』(エビステーメー叢書、朝日出版社、1980年)、p. 160.
- (19) Cf. *ibid.*, p. 51.
- (20) *Unicorn*, p. 98.
- (21) *Ibid.*, p. 118.
- (22) *Ibid.*, p. 177.
- (23) ジラルドは「模倣的欲望」(le désir mimétique) といっている。
- (24) *Unicorn*, p. 211.
- (25) *Ibid.*, p. 218.
- (26) *Ibid.*, p. 229.
- (27) 今村仁司著『排除の構造—力的一般経済序説』(青土社、1985年)、p. 206.
- (28) ジョルジュ・バタイユ著『エロティシズム』(波瀬龍彦訳、二見書房、1973年)、p. 33.